interview

前田　壽雄　先生

●まえだ・ひさお

武蔵野大学通信教育部人間科学部
仏教学専攻　教授

龍谷大学文学部真宗学科卒業。
龍谷大学大学院文学研究科真宗学専攻博士課程単位取得。
龍谷大学文学部非常勤講師、浄土真宗本願寺派総合研究所上級研究員、浄土真宗本願寺派東京仏教学院研究科講師、駒澤大学仏教学部非常勤講師、東京女子大学非常勤講師などを歴任。2022年より現職。
武蔵野大学仏教文化研究所研究員、武蔵野大学能楽資料センター研究員。

「生かされているいのち」への気づきが学び始めるきっかけでした。

―前田先生と仏教の出会いについて教えてください。

私は北海道北見市留辺蘂（るべしべ）町にある浄土真宗本願寺派のお寺の長男として生まれ育ちました。親から直接「後を継いでほしい」と言われたことはありませんが、ご門徒さんに良くしていただき、将来的に住職となることへの期待を幼いながら背負っていました。しかし、お経を読む機会は多かったものの、18歳まではその内容を本格的に学ぶ機会はありませんでした。お寺で育った者として、ご門徒さんとその教えを共有するためにも学ばなければという思いが、大学で真宗学を専攻する出発点でした。

もうひとつの大きなきっかけは、中学３年生と高校３年生のときに患った髄膜炎でした。受験勉強ができない苦しさもありましたが、それ以上に「いのちとは何であるのか」「私はなぜ生き続けることができるのか」という問いを持つようになりました。この病との向き合いを通して、私は「生かされているいのち」であることに気づかされました。この経験が、親鸞聖人の教えと自分自身のいのちの問題を結び付け、学びを始める根源となりました。

私は更に、29歳でIgA腎症と多発性嚢胞腎という指定難病を患うことになり、それはいのちの不確かさをより真剣に考えるきっかけになりました。単なる知識や教養としてではなく、自分自身の生き方やいのちそのものに関わりを持つ学びでなければ意味がないと痛感したのです。自分が学んだことをどう伝え、どう共有すべきかという問題意識が、現在の教育活動や研究活動に繋がっています。

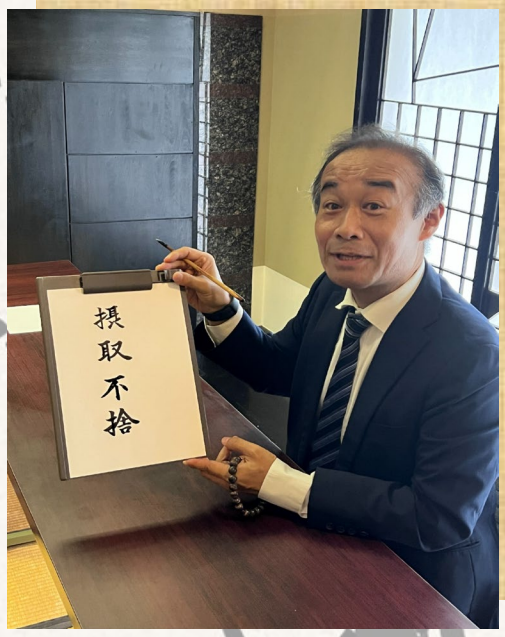
私以外は皆、人生の師である。

―仏教における対人支援はどのようなものですか。

仏教、特に浄土真宗の精神は、誰でも受け入れられるという特徴があります。築地本願寺が無料の「よろず僧談」を実施しているのも「誰にでも開かれている」という精神に基づいています。対人支援において、仏教はまず、人を超えた存在である「仏」のはたらきから考えます。仏から見ると、人と人との関係はみな繋がっており、誰もが光り輝いているいのちであるということが基本です。だからこそ、お互いに敬いあうという考えが生まれてくるのです。自分自身を知ることは難しいことです。仏様と向き合うことは鏡を見るように自分自身を照らし出し、自己を見つめ直すきっかけを与えてくれることに他なりません。人は一人では生きられず、私という存在は、誰か一人でも欠くことのできない皆に支えられて存在しているのです。私が相手にしてあげるよりも、相手からしてもらったことの方が遥かに大きいという現実を直視し、私以外は皆、人生の師であるという意識を持つことが、より良い人間関係、そして生き方へと繋がるでしょう。

―武蔵野大学通信教育部の学生にメッセージをお願いします。

人生というのは「思い通りにならないことの連続」です。今の私も、父が介護が必要になり、母が倒れ、妻が脳梗塞になるなど、家族３人が同時に入院するという大変な状況に直面しています。このような現実の中で、どうやって学びを続けることができるか、ということが私自身の人生の課題であり、学生たちに伝えたい真理でもあります。この大学で学ぶ意義は「人生においてかけがえのない財産」を身につけることにあるのだと考えています。
「摂取不捨（せっしゅふしゃ）」は信心の行者を大悲のなかに摂（おさ）め取って決して捨てない、という阿弥陀如来の救いの確かさを告げるもので「何があろうとも見捨てることなく永遠にあなたを守り続けますよ」という意味が込められています。このはたらきを知ることが、どんな困難の中でもあなたを支えてくれる確かなものになるのです。



前田先生、ありがとうございました！